第215回 愛知学院大学モーニングセミナー

新説！桶狭間の戦い

～これですべての謎は解ける～

歴史ライター　水野誠志朗　daysmizuno@gmail.com

2024年2月13日

初めに

- 信長に関してはこの十年ほどで研究が大きく進み、旧来のとらえ方が出来なくなってきている。そこでの信長は、全国制覇を目指した天才ではなく、普通の為政者だったとされる。
- 私も同じ立場をとるが、その視点で桶狭間の戦いまでの若き信長の姿を考えてみたのが拙著『若き信長の知られざる半生』である。ここではこれまでとは全く異なる信長や尾張の姿を描いたつもりだ。そこで本日はこの本に従って桶狭間の戦いの新説を解説する。

基本的な考え方

- 一昔前は、海道一の弓取りとされる強大な戦国大名川義元が、上洛の大軍を押し進め、これに弱小国尾張の若き大名である信長が、小兵でもって奇襲攻撃して義元を討ち取ったとされるが、流石に今は、これを主張する人はいない。
- 義元領国と信長尾張の国力は拮抗しており、特に前年に上洛を果たして、信長は尾張守護とも言えるほどの地位と経済力、そして軍事力を持っていた。それは当然義元も知るところであり、そうした信長の反撃に備えて総力で出陣してきたというのが、実情であろうと考える。

若き信長の時代・簡易年表

西暦	元号	信秀と信長の満年齢	出来事
1501年	文亀元年		尾張守護斯波義寛が遠江引馬城で今川方に敗れる
1505年	永正2年		尾張愛知郡井戸田は水野為則に実権が移り、那古野今川氏が衰退
1506年	永正3年		今川氏親が東三河今橋城を落とすも今川軍一時撤退
1508年	永正5年		10月、伊勢宗瑞の今川軍が再度西三河へ侵攻するも敗北
1511年	永正8年	信秀0歳	松平清康生まれる。信長父信秀もこの年に誕生と考えられる
1513年	永正10年	2歳	3月頃、斯波義達が遠江を攻撃するも今川氏親が勝利し、義達は尾張へ逃げ帰る
1517年頃	永正14年	6歳	今川軍が東三河渥美郡田原まで乱入、戸田氏が敗れる。義達は引馬城で囚われ僧体とされる
1519年	永正16年	8歳	今川義元誕生
1524年頃	大永4年	13歳	信長祖父織田信貞が津島掌握。その頃、実質的な安城松平家四代は松平信定
1526年	大永6年	15歳	信貞死去した模様。松平広忠誕生。この頃、松平信定が守山城に入る
1527年	大永7年	16歳	家督を継いだ信秀を後見していた母いぬゐ死去。この頃信秀と清須勢が不和に
1531年	享禄4年	20歳	この頃までに今川竹王丸(義元弟)が那古野今川氏の養子となる
1532年	天文元年	21歳	信秀が清須斯波達勝・織田藤左衛門と戦うも和談
1533年	天文2年	22歳	信秀、清須土田政久女と婚姻
1534年	天文3年	信長0歳	5月21日、信長、勝幡城で誕生
1535年	天文4年	1歳	12月5日守山崩れで松平清康死去。松平信定が岡崎城に入る
1536年	天文5年	2歳	花倉の乱で17歳の義元、今川家当主に
1537年	天文6年	3歳	松平信定死去。松平広忠、三河へ帰国した模様
1538年	天文7年	4歳	9月、織田信秀、今川氏豊から那古野城を奪取
1539年	天文8年	5歳	3月、信秀、熱田を支配し熱田の加藤延隆に商売上の特権を与える
1540年	天文9年	6歳	尾張勢が安祥城を攻撃。大樹寺過去帳では9名の死亡確認
1541年	天文10年	7歳	3月に信秀が伊勢神宮へ七百貫文を寄進。広忠と水野妙茂女(於大)が婚姻
1542年	天文11年	8歳	信長、那古野城を与えられる。斎藤道三が美濃支配完了。12月26日松平竹千代(家康)誕生
1543年	天文12年	9歳	信秀、朝廷へ4000貫文献上。水野信元が信秀につき、於大が松平から離縁される
1544年	天文13年	10歳	信秀が美濃侵攻、9月に稲葉地城下まで侵攻するも道三に大敗
1545年	天文14年	11歳	義元、北条氏康と和睦。駿河東部を確保。三河侵攻へ
1546年	天文15年	12歳	信長、古渡城で元服。松平広忠が安祥城を攻撃するも敗走
1547年	天文16年	13歳	9月、信秀は義元と相談して三河へ侵攻し、岡崎を落とす。竹千代が人質に。信長、大浜攻撃で初陣
1548年	天文17年	14歳	義元、信秀決裂。11月、大垣城を囲まれ、信秀は美濃へ反攻。同月20日、清須衆が古渡城を攻める
1549年	天文18年	15歳	信秀、3月19日小豆坂合戦で今川に敗北。9月、清須衆と和睦、斎藤道三と同盟
1550年	天文19年	16歳	松平広忠死去。病の信秀は安祥城を今川にとられ、織田信広と竹千代の捕虜交換が行われる
			1月、犬山・楽田衆春日井原へ進出。信秀重病。5月今川勢、笠寺まで進出。信長は丹羽氏識と「横山の闘い」
			今川勢が尾張へ侵攻。12月、後奈良天皇から和睦勧告、今川勢が帰陣。義元は信秀の所望で刈谷を赦免
1551年	天文20年	17歳	3月、信秀死去(諸説あり)。停戦で一時の平和。尾張各地で親今川勢力台頭。
1552年	天文21年	18歳	3月3日、万松寺で周忌法要。4月17日信長、山口親子と「赤塚合戦」。9月に再び今川勢が八事まで侵攻
			8月15日清須勢が深田城など占拠し「萱津合戦」で信長が勝利。その後、簗田弥次右衛門の手引きで清須攻め
1553年	天文22年	19歳	閏1月13日平手政秀自害。4月下旬斎藤道三と聖徳寺で会見
			7月12日坂井大膳らが守護斯波義統殺害。嫡男は信長の元へ。7月18日柴田勝家軍が清須攻め(中市場の戦い)
1554年	天文23年	20歳	1月水野信元を助けるため「村木砦の戦い」。4月織田信光が清須城を陥れ信長に引き渡す。11月信光死去
1555年	弘治元年	21歳	この年、賀茂郡の鱸、上野の酒井忠尚、西条吉良義昭の反今川ベルトができ今川勢は後退
			6月信長弟秀孝誤射事件。守山城を包囲し、信時を城主に据える。閏10月10日今川の太原雪斎死去
1556年	弘治2年	22歳	3月、信長、西三河へ侵攻し「野寺原合戦」。4月、道三が斎藤義龍に討たれ、援護に向かい「及川合戦」
			8月24日蜂起した信勝の柴田・林勢と「稲生合戦」。勝利しさらに那古野城、末盛城を攻める
			生駒氏女を妻とする。鳴海城山口親子が義元により謀殺。沓掛城、大高城が今川方へ
1557年	弘治3年	23歳	4月上旬三河上野原で尾張と三河の守護らが対面し今川と一時和睦。嫡子信忠誕生
1558年	永禄元年	24歳	2月、今川方に寝返っていた笠寺の城を攻撃した模様。3月7日松平勢の入っていた品野城を攻めるも敗北
			7月犬山織田信清の協力を得て岩倉城攻め「浮野合戦」。守護斯波義銀を追放、11月2日弟信勝を謀殺
1559年	永禄2年	25歳	2月堺から奈良を通って上洛。その間、斎藤方による暗殺計画が露見。4月三河国高橋郡攻め
1560年	永禄3年	26歳	5月19日桶狭間の戦い

当時の信長と義元の経済力、軍事力に大きな差はない

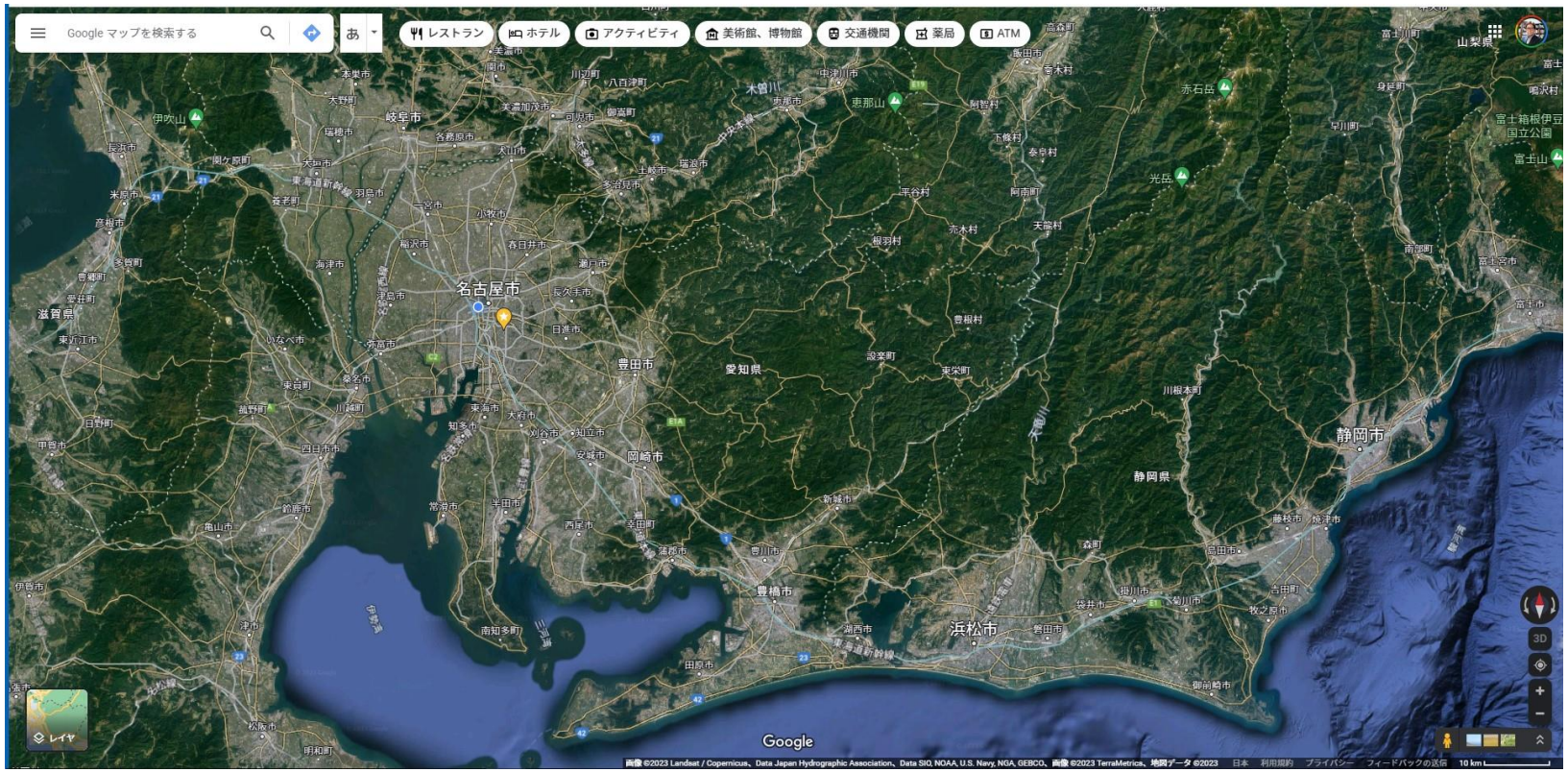
尾張と他国の国力の差→
裕福な尾張

信長の死後、1598年の太閤検地によれば

今川　駿河15万石（静岡県中部）
　　遠江25万石（静岡県西部）
　　小計40万石
　　三河29万石（愛知県東部）
　　合計69万石

織田　尾張57万石（愛知県西部）

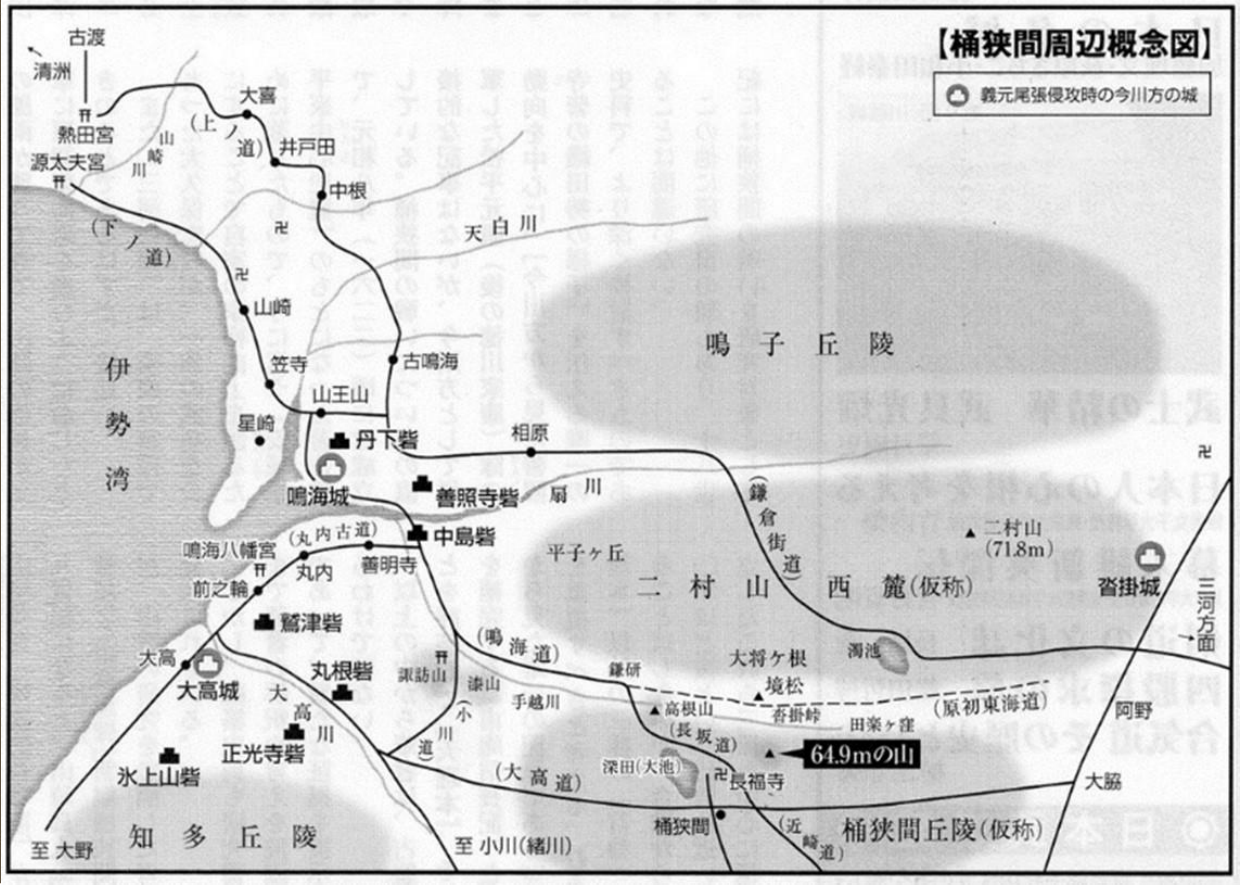
斎藤　美濃54万石（岐阜県南部）
武田　甲斐22万石（山梨県）
長尾　越後39万石（新潟県）
　　信濃40万石（長野県



当時の愛知県（尾張と三河）　今とは海岸線の違いに注意

当時は海が内陸に入り込んでいて、**大高城も鳴海城も海（伊勢湾）沿い**にあった。このあたりはほとんどが低い山で、平地は山と山の間に僅かにあるだけ。東南へ山を超えると衣浦湾となり豊明市の国道1号線あたりまで海が入り込んでいた。

東海道は江戸時代に整備されたもので、桶狭間の戦いの頃にはまだ細い獣道（閑道）があるだけだった。有松は江戸時代になってから人工的に作られた集落で、この時代にはなかった。



『若き信長の知られざる半生』より

重要なポイント

- 領地の少ない今川は東国の論理で、西に領土を拡張しようとした。
- 身分の高い今川一族は尾張国内にも勢力を持っていた。
- 信長は天皇からの停戦勧告を破って戦いを始め「大うつけ」と呼ばれた。
- 信長は約十年間の過酷な実戦経験を積んだ。
- 信秀のような傭兵部隊ではなく、親衛隊（職業戦闘兵）を養成した。
- 国内の敵は親今川勢だった。
- 三河の反今川勢を支援した
- 二年前には、尾張へ侵攻した今川勢の大半を追い返し、守護まで追放して尾張の主というポジションを確保した
- 上洛して将軍を助けることを決意した信長は、今川を追い出すため、決着をつけるべく、桶狭間の戦いを仕掛けた。

『信長公記』天理本と『三河物語』だけで考えること

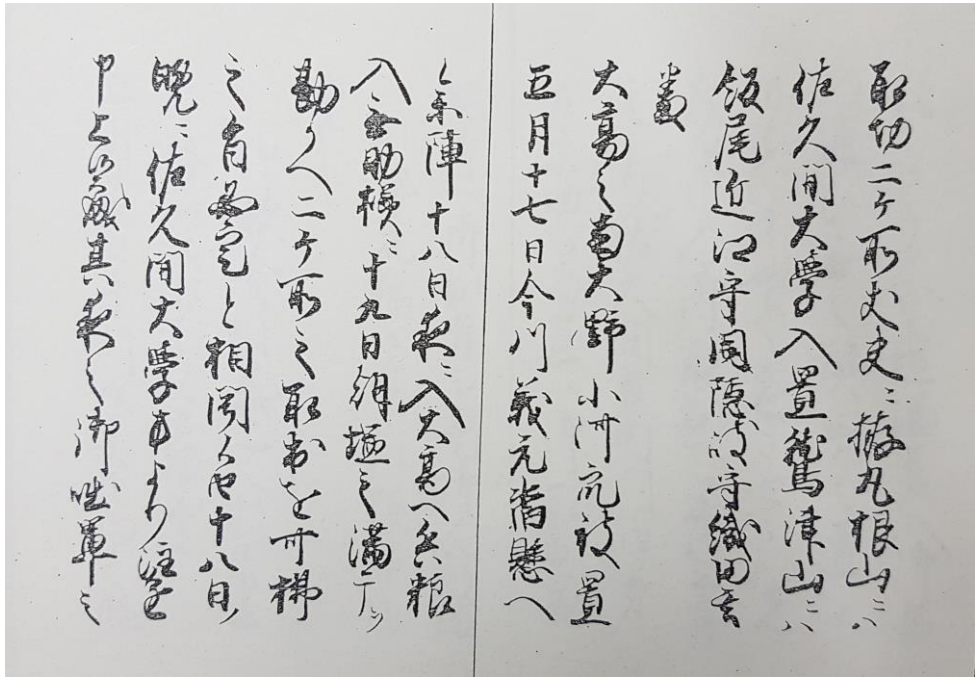
しかし今川氏真文書など評価が確定している史料は用いる

「桶狭間の戦い」は織田方の史料がほぼ皆無という状態。
唯一信頼できる史料として位置づけられているのが『信長公記』。
特に「天理本」の首巻部分が、2014年に『愛知県史資料編14』で「陽明本」と比較できる形で紹介されるようになったのは大きい。

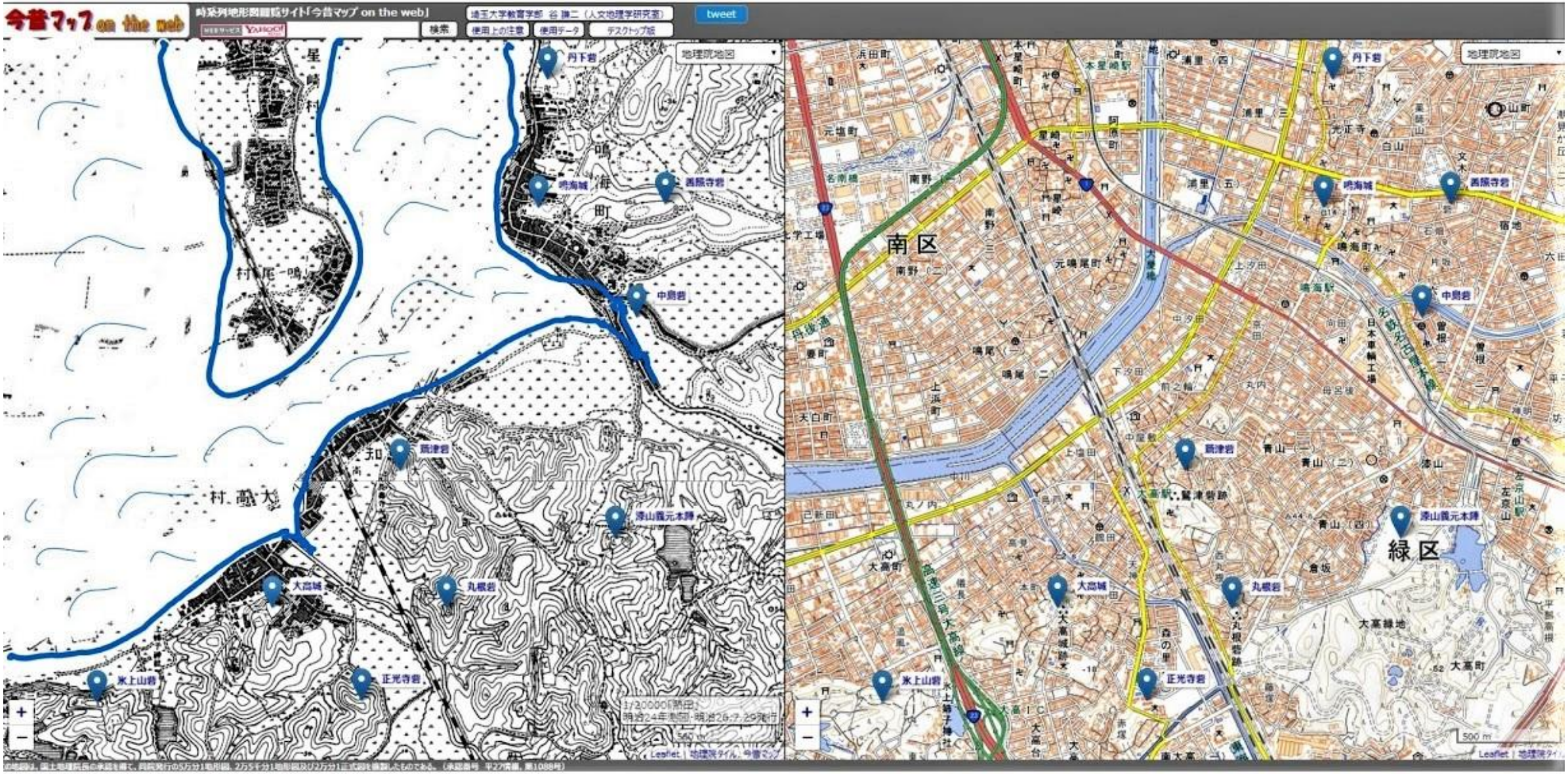
最も古い形態と思われる天理本とは

天理本には他の『信長公記』とは異なる記述がたくさんある。他の信長公記にはなく、天理本にしか書かれていないことで、事実に合致することがたくさん記載されているため、天理本は信頼に値するといえる。

天理本『信長公記』
原本五行目
「大高之南大野小河衆被置」



大高城を囲むには4つの砦が必要(正光寺・丸根・氷上・鷲津)



天理本と三河物語のみを参考にすること

天理本だけではわからない部分を考える上で参考にするのは『三河物語』だ。同時代の、しかも松平側が書いた貴重な資料として、徳川史感を排して慎重に読みたい。この二冊は、江戸初期に書かれており、戦いの記憶が残る人が存命だった時代の著作物だから、ベースとなる史料にすべきだろう。その『三河物語』の記述を読むと、義元は大高城へ入ったとしか思えない。

同時代ではない文献を参照しない

100年も経っていない太平洋戦争の話は、現代でも絶対的な事実がわからない。したがって江戸時代中期以降に書かれた研究書の類は参考にしないことが重要と考える。特に明治初めに日本陸軍が書いた『日本戦史』はでたらめと断定したい。

なお、天理本をベースに書かれたと思われる『甫庵信長記』は参考程度として、慎重に扱う。

江戸時代、義元大高城入りは知られていた

江戸時代、山崎真人の『桶狭間合戦記』(一八〇七年)が出るまでは、『三河物語』が読まれていただけに、義元が大高へ行ったという説が、割に知られていたようだ。が、それを山崎がこの本で否定して以後、語られなくなる。

一説に此十八日、義元大高へ行き、即ち、大高の城にて評儀有て丸根・鷲津の両城を攻落し、其後、桶狭間山の北に陣取給ふといへ共、此説非なり、義元此時、大高に有て丸根・鷲津の両城を攻取りなば、鳴海ハ程近かけれハ、善照寺辺の砦々を攻るに手寄もよく、夫より熱田表へ進発も順路なり、其上、敵地に入て用心ニも直に大高の城ニ在陣してよかるべきに、又跡へ戻り桶狭間山の中に野陣せし事、其理、曽て心得がたし、此説、尤非なり、

山崎は義元が桶狭間へ後退したと考えられなかったため、大高へ入ったことを否定した。この頃には豊明の古戦場伝説地が合戦場所・義元討死場所とされるようになっていたことも大きいだろう。

新説であれば信長の演説を説明できる

「みなよく聞くように。あそこに見える敵勢は、昨夜の夕方に食事をしただけで、一晩かけて大高まで行軍して兵を入れたうえ、今朝は鷲津・丸根という二つの城攻めを行って骨折りし、青息吐息で、くたびれている敵ではないか。味方はまだ一戦もしていない新手であるぞ。

それだけではない、兵数が少ないからと言って大軍を恐れるな、運は天にある。次のような戦訓を知らないか。味方が攻撃していけば敵は退く。敵が退いたらそれに付け込み敵に密着して離れるな。 かさにかかって攻め立てよ。こうすれば必ずや敵をひねり倒し、追い崩すことができるのは言うまでもない。

一切分捕りをしてはならない、この戦いに勝ったならば、この場に参陣した者は家の名誉である。末代までも功名が鳴り響くのだ。ただただ各々力を尽くせ」

「各能々承候へ、あの武者は宵に兵粮つかひ夜もすから参り大高へ兵粮入、鷲津・丸根両城にて手ヲ砕辛労して草駄たる武者也、こなたハ新手成、其上莫小軍ニシテ怖ルゝコト大敵ヲ、運は在於天、此語ハ不知乎かゝらハ引、ひかは引付、於是非稠倒シ可追崩事案ノ内也、一切不可為分捕、軍に勝ちぬれは此場へ乗たる者家之面目末代之高名也、唯可励」（天理本首巻より）

- この演説は正面攻撃説などこれまでの諸説で説明がつかない。信長の勘違いとか、兵を鼓舞するための方便だとか言われているが、クライマックスシーンでそんなことを『信長公記』が書くとも思えない。この演説は正しいとして考え、説明できる全容を考える必要がある。

桶狭間の戦いの新説、その骨子

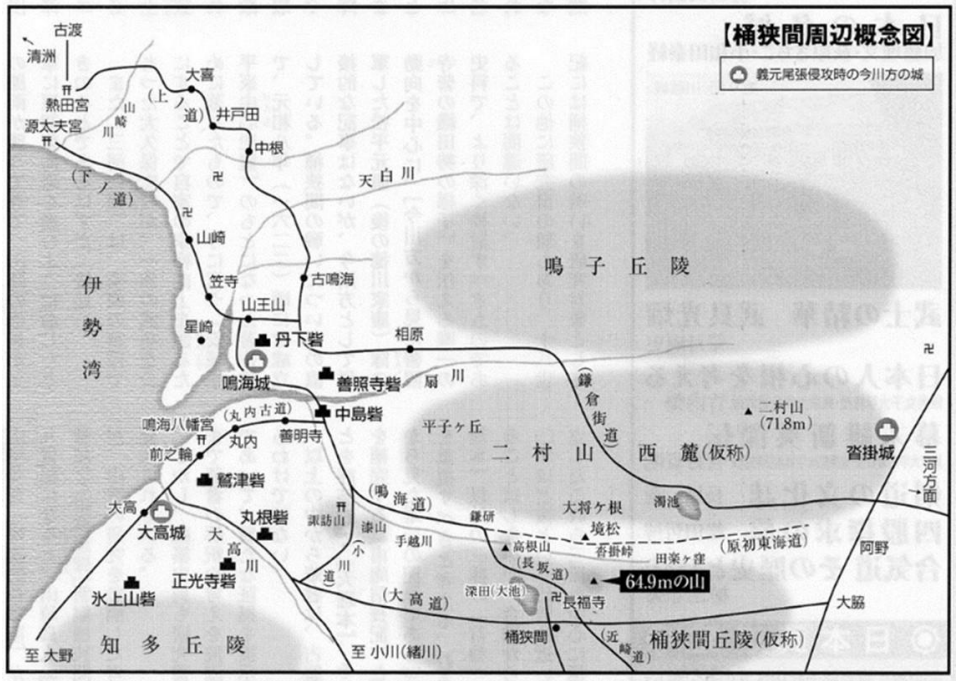
2018年に民間の研究者であるかぎや散人氏が発表した新説を、わかりやすいよう最初に箇条書きする。

1　義元は信長に囲まれた大高城を後詰（救援）するため、必勝体制の大軍でやってきた。
2　義元は元康（家康）とともに前日に大高城に入り、砦を巡見した。
3　戦い当日、義元は漆山に本陣を置き、夜明けに鷲津・丸根砦を攻めさせた。
4　2つの砦を落としても信長が現れないので、三河への撤退を始めた。
5　義元は織田方目前を威嚇しながら鳴海～桶狭間道を桶狭間に向かって撤退し始めた。
6　義元が高根山に着いた時、信長が善照寺砦に到着した。
7　先行していた佐々・千秋隊が撤退を遅らせようと襲撃したが完敗した。
8　義元が信長の攻撃はないと判断し、一隊を残して高根山を下り、桶狭間の高所に移った。
9　攻撃を決めていた信長は、制止を振り切って、中島砦を出陣した。
10　信長が高根山の裾野まできた時、ゲリラ豪雨となり、義元勢は大混乱した。
11　信長はこれを戦機と判断し、豪雨にまぎれて閑道（後の東海道筋）を進み、義元本陣右翼へまわりこんだ。
12　雨が上がったと同時に、北から義元勢に突入し、東の義元本陣を発見し襲った。
13　短時間の戦いで義元は討ち取られ、今川勢は敗走し、信長が勝利した。

このように両軍が常に戦場を移動していたと考えることで、すべての謎が解けることになる。

当時の道は数えるほどしかない

　沓掛城のある沓掛村から二村山を超えて相原村、鳴海村を通り熱田神宮方面へ向かう鎌倉街道。信長の時代になるとこの道は二村山に登らず、裾野の濁池の北あたりを通ったようだ。
　大高道。これは沓掛から南の阿野へ進み、そこから西に向かい、桶狭間を経て大高へ進む。
　鳴海から大高に行くには中島まで進んで海沿いに海岸の道（丸内古道）を進むか、中島の南、漆山の西の谷筋から緒川道（小川道）で丘陵を超え大高道へ出るかだ。
　鳴海から桶狭間へ行くには中島から現在の東海道筋を少し進み、長坂道で高根山の峠を越えて行くしかない。道はこれだけで、人馬や物資の多い大軍勢となれば、これらの道を通るしかない。



雑誌『歴史群像』157号より

道を閉鎖するための砦

　鷲津砦と海で丸内古道を塞ぎ、大高城の南側では氷上砦がその役目をする。大高道と小川道は丸根砦と正光寺砦で塞ぐ。つまり重要なのは正光寺砦で、これと丸根砦の二つがないと大高道と小川道の封鎖はできない。天理本以外の信長公記では正光寺砦が出てこないので、大高城は封鎖できない。天理本が正しいのはここのことからも明白だ。

乱捕りできるような村はなく、人もいない

　今川軍は乱捕り（敵地を襲って略奪すること）をしていて、そこを突かれたという説があるが、数千もの今川軍が乱取りできるほどの村はなく、乱取の伝承もない。裕福な村は存在しなかった。ほとんど丘陵で耕作の難しい土地だからだ。

日本陸軍の迂回奇襲説と現在の正面攻撃説

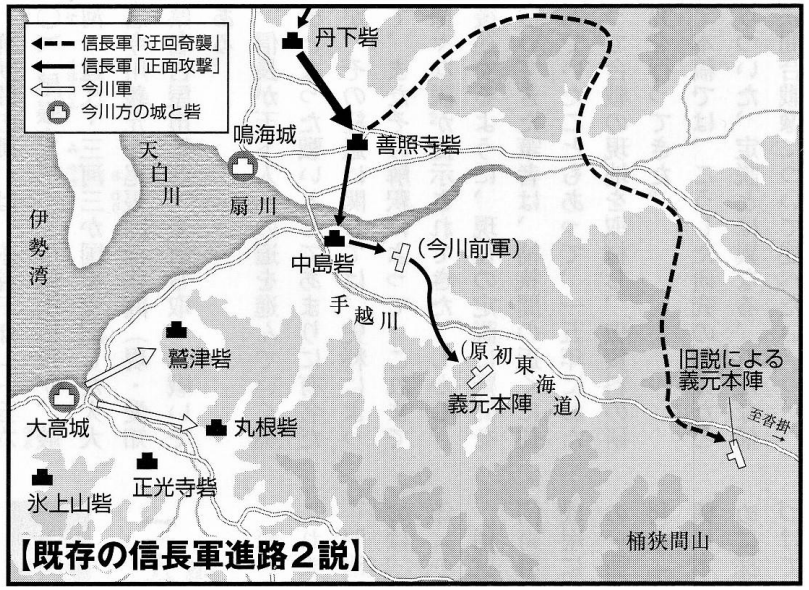
現在の主流、正面攻撃説とは

義元は、18日に沓掛城に入り、一泊。この夜に松平元康が大高城への兵糧入れを成功。

翌日の19日、午前10時頃に沓掛城を出て、昼前に桶狭間へ着いた。義元がここに来た時、今川勢の前軍は善照寺砦から見て南東の丘陵に展開しており、そのエリアを支配しているのは今川勢だった。その前軍の後方の桶狭間山（高根山ヵ）に義元本陣があった。しかし桶狭間山がどの山かははっきりしていない（桶狭間の64.9mの山頂部分にいたのでは、佐々隼人正・千秋四郎らが義元軍に攻撃をかけ、簡単に敗北した戦いが見えない）。

佐々らの敗北を善照寺砦から見ていた信長は、中島砦に移り、制止を振り切って出撃する。この出撃前の信長の演説・訓示を信長の「誤認」だとする。味方を鼓舞するための方便として使ったともいう。

信長勢は正面から前軍に立ち向かおうと南東へ軍勢を進め、丘陵の山際まで進んだところ、背後から風雨が吹きすさぶ豪雨となった。今川勢には顔に吹き付ける嵐だ。この風雨を避けようと今川軍は乱れることになる。じっととどまっていたと思われる信長軍は雨が上がったときに東に向かって攻撃を開始。雨で混乱していたためか義元前軍は簡単に崩れ、義元が討ち取られた



雑誌『歴史群像』157号より

正面攻撃説で解けない疑問

まず信長の訓示は本当に誤認なのか。義元は何を目的として、どこへ行こうとしていたのか。なぜ桶狭間へは夜明けから考えると6時間以上も経過した遅い時間に来ているのか。信長と一戦交えるつもりなら、朝から布陣していないといけないだろう。 佐々らは出陣してすぐ攻撃を受けているのに、信長はなぜ今川前軍からの攻撃を受けずに山際まで進めたのか。正面から少数の軍勢が突っ込んで前軍をすべて蹴散らし、山の上の本陣にたどり着いて大将を打ち取るなどということができるのか。

新説・追い込まれていたのは義元

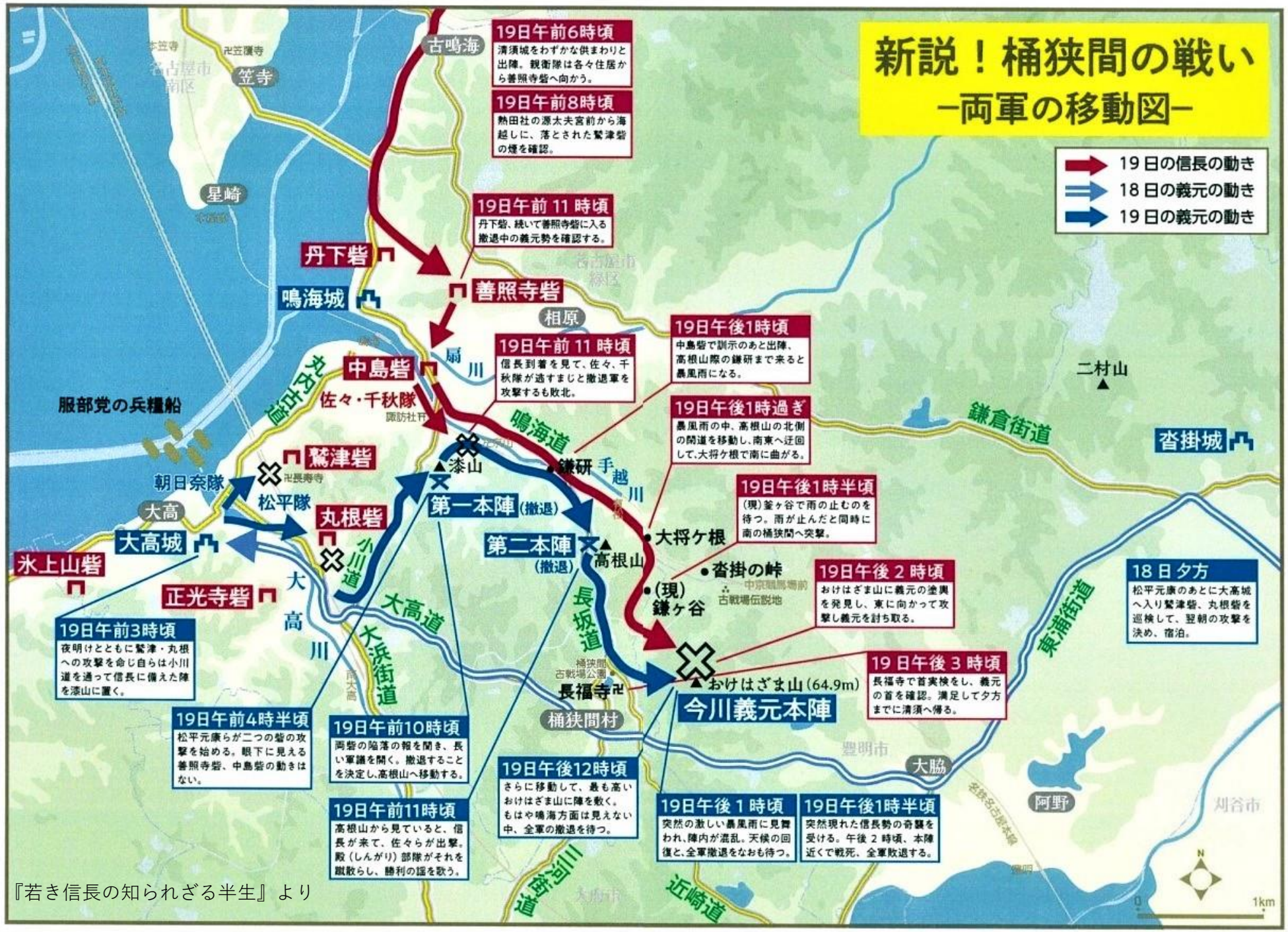
信長は約十年ひたすら今川勢と戦い続けてきた。そして桶狭間の前には今川勢の大半を尾張から追い返している。もし今川方がこのエリアを押さえているのなら、たやすく大高城を砦で囲まれたりはしないだろう。つまり戦い直前に尾張三河の国境地帯で劣勢となっていたのは今川方といえる。このため完全封鎖された大高城は兵糧に事欠き、駿河からの救援を求めざるをえなくなった。

三河方面軍の司令官だった太原雪斎を失って自ら出陣するしかない義元は、それに応えるため、絶対に負けないだけの軍勢を揃えて尾張へ出陣した。占領していた三河も信長の調略によって反今川勢力の蜂起が相次ぎ、元康を中心に収拾をはからせようとしていたが、ついに自らが出陣して威厳を示し、動揺を治めることが必要になってきていたのだ。

完全な勝利で大高城の後詰を成功させる、それこそが家督を氏真に譲り、自らが先頭に立って尾張に向け出陣した理由だった。ただ、文化人でもあった義元の戦闘経験は、困難な戦いを勝ち残ってきた信長とは比較にならない貧弱なものだった。こうした認識が新説のベースにある。

「稲生の戦い」の両軍進路図

信長は1556年の「稲生の戦い」でも自ら仕掛けて半数以下の700で、1700の柴田勝家勢に勝利を収めている。若い頃から信長にはカリスマ的な強さがあったことは間違いないだろう。



『若き信長の知られざる半生』より

新説・義元は大高城から漆山へ

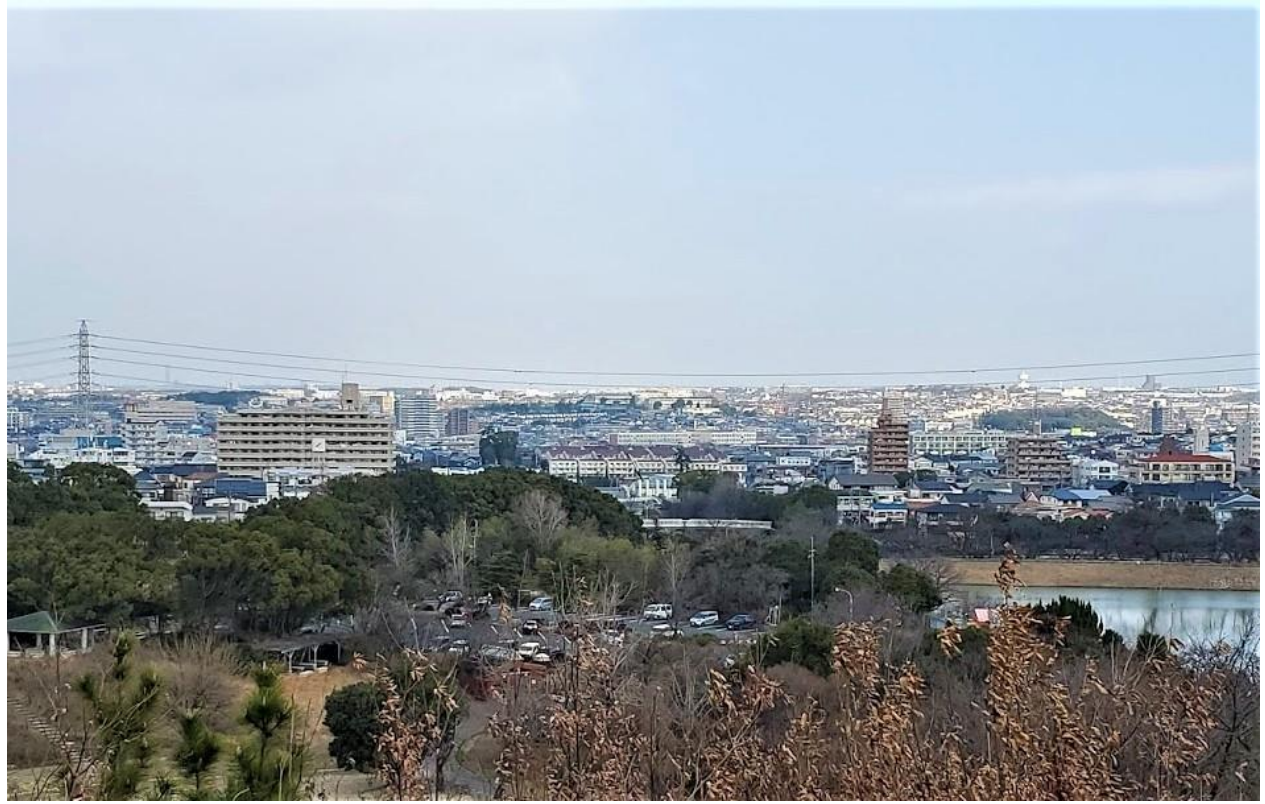
『三河物語』には「義元は知立よりだんだんに押し出して大高へ行き、敵の砦を巡検し、ちょっと長く打ち合わせをして、では攻め取ろう、元康がやれと決めた」とある。この巡検と評定は18日に行われたことになる。上洛や尾張制圧ではなく大高開放が義元の目的だとしたら、三河物語のこの記述は理解できる。わざわざ沓掛城に入らなくてはならない理由はない。つまり義元は元康の兵糧入れに続いて、自らも大高城へ入って、戦況を確認したのだった。そして信長方の砦を巡検し、翌日の攻撃を決め、作戦全体を決めた。

その作戦とは、翌朝、元康らが砦の攻撃を始めれば、救援するため鳴海方面から信長の援軍が来るはずゆえ、その援軍を義元本隊が阻止し、信長本人が来るならそれを討ち取ろうというものだった。

大高城から丸根砦、鷲津砦を見る

そこで当日夜明け前に、義元本体は砦の攻撃開始より早く大高城を出て、小川道へ進み、鳴海方面が一望できる漆山に本陣を置いた。ここなら信長たちが来れば迎え撃てる。

夜明けから鷲津・丸根両砦の攻撃が始まって、午前8時頃には両砦は陥落したようだ。ところが援軍の信長は来ない。義元はしばらく漆山に留まったが、信長が来ないため、次の動きを考えていた。おそらく午前10時頃だろう。



漆山は削られて住宅地になっている。近いのが大高緑地公園の展望台

桶狭間合戦之図（一部分）　名古屋市蓬左文庫所蔵

新説・戦慣れした信長は前夜から戦いを公言していた

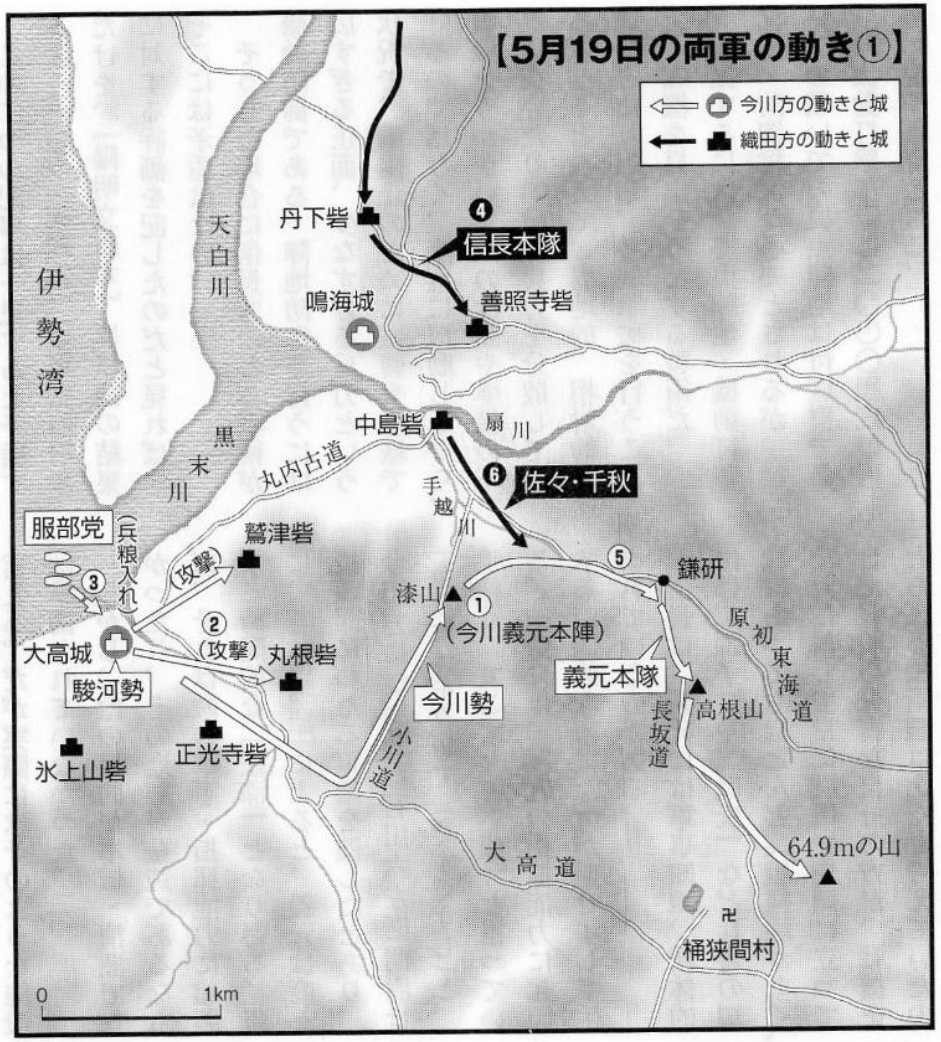
決戦前夜の18日夜だが、天理本によれば軍議が開かれていた。家老衆は籠城論を出したが、信長は国境で一戦を遂げると明確に宣言している。

天理本以外では、信長が決戦を行うといいつつ何の作戦も示さなかったので、家老衆が呆れたと書かれているが、天理本ではそのあとに酒を出し、芸人も入れて大宴会が催されたことが書かれている。

『三河物語』には義元が度々長時間の軍議を行ったと書かれている。そして歴戦の三河武士と思われる石川六左衛門尉を呼び出して意見を聞いた事も書かれている。

六左衛門尉は「敵の数は少なくない。こんな長評定はしていてはよくない。良い結果になるはずがない。すぐ動くべきだ」と言ったようだ。このように義元は戦場慣れしているとはいい難い状況に思える。

義元がこういう状態であることは、長年今川勢と戦ってきた信長には、ある程度わかっていたと考えたい。動きさえつかめれば、少数の自軍でもそれなりの勝機があると考えていたのだろう。



雑誌『歴史群像』157号より

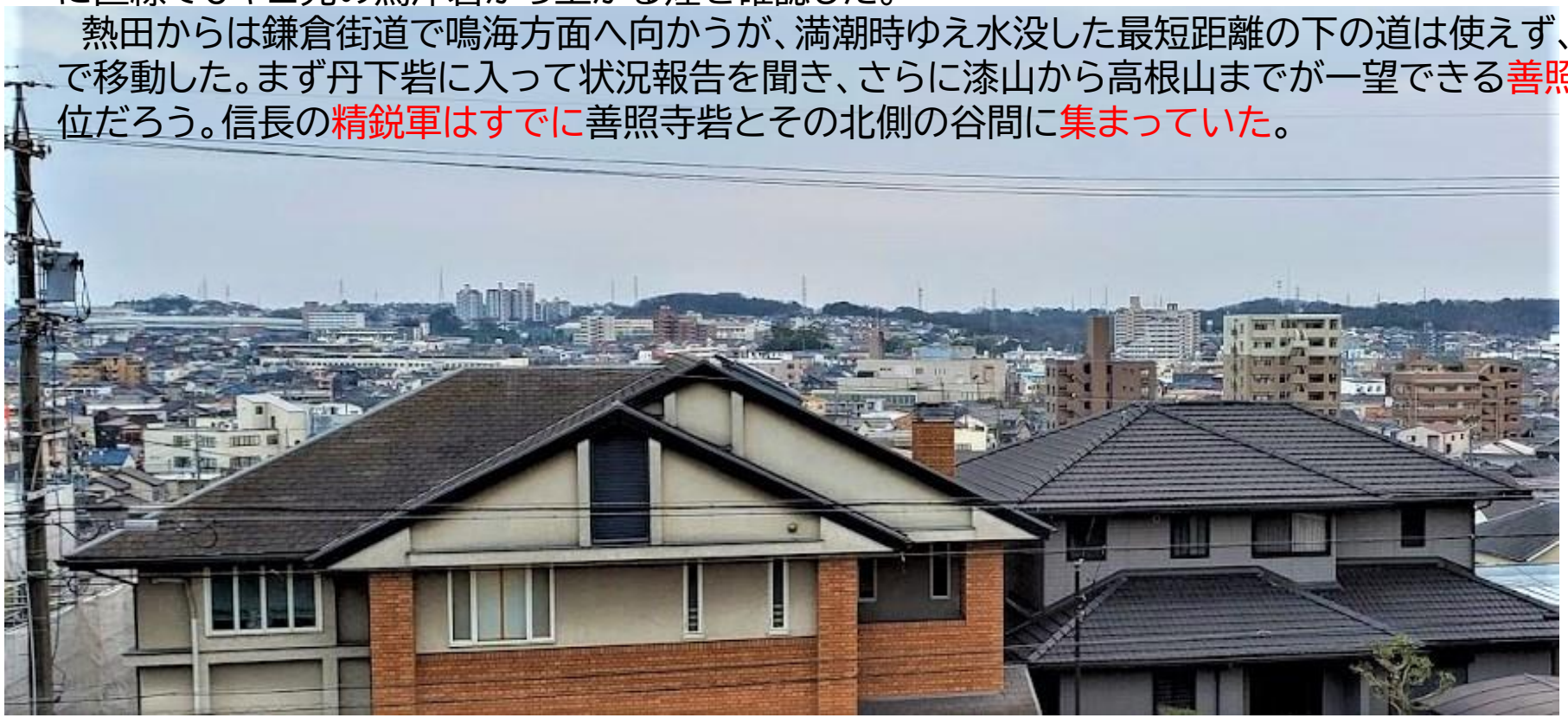
新説・信長当日の動き

信長は砦が落ちたという知らせで目を覚ます。攻撃があることを知りながら前日は宴会をしていたくらいなので、これは想定通りだろう。夜明けの4時に敵が動き出した知らせは、二時間で清須まで届き、午前6時には信長に伝わったはずだ。この時点で義元本体が漆山にいることも連絡があっただろう。

前夜に国境で一戦を遂げると言ってあるので、各地に住んでいる2000の戦闘員は、朝から各々がそれぞれ善照寺砦へと向かっているはずだ。全員を集めてから移動するなど無駄だ。

いくつかの神社で戦勝祈願をしながら午前8時には清須から12キロ離れた熱田・源太夫宮の前浜まで着いた。そして海越しに直線で6キロ先の鷲津砦から上がる煙を確認した。

熱田からは鎌倉街道で鳴海方面へ向かうが、満潮時ゆえ水没した最短距離の下の道は使えず、上の道で約10キロを大急ぎで移動した。まず丹下砦に入って状況報告を聞き、さらに漆山から高根山までが一望できる善照寺砦へ入ったのが昼前、11時位だろう。信長の精鋭軍はすでに善照寺砦とその北側の谷間に集まっていた。



善照寺砦からの眺望

新説・義元は撤退を始めた

さて義元の方だが、午前10時ごろまで漆山で信長がやって来るのを待ち構えていたが、鷲津・丸根両砦の救援に出陣してこない。両砦は完全に落ち、義元としては大高城の開放作戦は大成功に終わった。

そこでおそらくまた軍議をしたのだろう。そして、兵を損じておらず、また昨日からの移動で疲労していることもあって、全軍での撤退を決めた。この時間なら明るいうちに三河へ帰れる。そしてここからは当時の撤退戦の常道どおりに「繰退」を行うことになった。

まず義元のいる軍勢が漆山を下りて、手越川沿いに東方面へ進み、長坂道を通って高根山の山頂まで退き、ここを本陣として情勢を目視しながら後続部隊の撤収を助けることになった。『三河物語』でも先ほどの石川六左衛門尉が「早く三河へ帰らせてくれと言って足を速めているうちに、敵兵が山に上がってきた。それを見て残っていた兵も我先にと退く」と書かれており、これを素直に読めば撤退中だったということになるだろう。

信長がやってきた11時頃は、義元本体は2.5キロほど離れた高根山山頂まで退いており、残りの部隊が撤収しているところだった。

ここで始めて戦闘が起きる。信長が善照寺砦に来たので、中島砦にいたであろう佐々・千秋ら300が撤退勢を足止めしようと今川勢の殿に襲いかかった。しかし佐々・千秋が討ち取られ、この緒戦は信長方が敗北。

高根山からその戦いの様子を見ていた義元は喜び、謡を歌ったと信長公記は書く。今回の作戦における自軍初めての実戦勝利ゆえ、義元が喜ぶのは理解できるところだ。

上：高根山からの眺望　下：おけはざま山からの眺望

新説・義元は完璧に作戦遂行

高台の善照寺砦で義元同様にこの戦いを見ていた信長は、軍勢を中島砦へ移動させようとした。すると家老衆が、中島砦への道は一本道で、高根山の義元から我々の少ない兵力が丸見えだから、と必死に止めようとした。
信長は最初から少数の精鋭部隊だけで戦うつもりなので、見られることなど気にせず、軍勢を中島砦へ移した。義元たちからは丸見えだったが。『三河物語』には石川六左衛門尉が呼び出されて「（歴戦の勇士のあなたに聞くが）見えているあの兵達にツワモノがいると思うか」と問われた六左衛門尉は「新しくやってきたあの兵の中に、これというツワモノがいないはずはない。高い所から見下ろすと敵の数は少なく見えるものだ。5000もいないだろうと笑われるが、どうしてそういえるのか。そんなことを言っているより早く退くべき」と生々しい証言をしている。
この頃、義元本体はすでに高根山から繰り退いて、1.5キロほど離れた、桶狭間村の最高峰である、いわゆる64・9メートルの山の上に本陣を移動し、高根山の後続部隊の収容過程に入っていた。義元からは前方の高根山に遮られてもう善照寺砦方面は見えない。しかし前方の桶狭間村の深田が天然の堀となるこの立地は、繰退の本陣としてふさわしい安全な場所と考えられる。そしてこのあと全軍が撤収できたら、次は南側の大高道に入り、三河へ帰ればいいだけだ。義元の大高城後詰作戦はここまで完璧に「成功」で進んでいた。

新説・信長の訓示は正しい

信長は中島砦から出撃しようとしたが、家老衆はすがりついて出陣を止めようとした。やはり敵の撤退を見ていて、その多さが分かっていたため、少数の兵で勝てるとは思えなかったからだろう。しかしその時信長は例の「訓示」を吠える。
これを聞いた全員が奮い立っただろう。桶狭間の戦いにおけるまさにクライマックスシーンだ。
ただこのあと、間抜けなことに前田利家らが先ほどの緒戦でとってきた首を見せに来たので、信長は彼らにもいちいちこの訓示を言い聞かせている。このタイミングだから前田利家の勘当が解かれなかったのも当然だろう。

いよいよ信長の精鋭軍は中島砦を出撃する。現在の東海道筋（鳴海～桶狭間への道）を手越川沿いに1.5キロ進み、義元勢の殿がいる高根山の麓となる鎌研まで到達する。信長はここから長坂道を進んで、高根山を正面攻撃するつもりだった。戦意の低い撤退軍なら十分勝てると踏んでいたはずだ。

いわゆる正面攻撃説では、鎌研までの間にも今川勢がいたはずなので何事もなく鎌研に達したことの説明がつかないが、撤退説であれば敵はすでに撤退していないので、鎌研まで戦闘が起きずに進軍できたことの説明が付く。

信長はこの時、義元の本陣位置がわかっていたはずだ。義元の繰退ルートは地形と道がわかっていれば想定できる。高根山の次には64.9mの桶狭間山に本陣を置くはずと、信長には十分予測が付いていた。

その時、にわかにかき曇り、信長たちの背中の方向から豪雨がふりつけてきた。局地的なダウンバーストでも起きたのか、凄まじい雨と風が荒れ狂い、義元勢には正面から吹付けた。この風雨を避けるため高根山も桶狭間山も混乱に陥った。雹が降ったり、槍に落雷したりということもあったかもしれない。高根山に残っていた撤退の殿勢はこの雨に混乱し、普段なら見える眼下の信長勢を見失っていた。

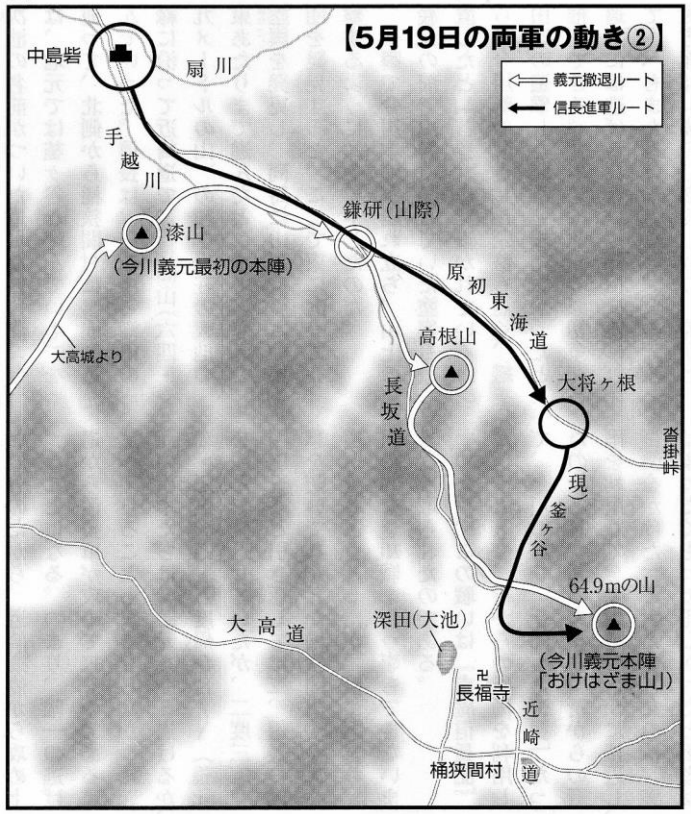
信長はこの機を逃さなかった。この頃はまだ東海道はないが、閑道は存在していたので、雨に紛れて今の東海道筋にあたる閑道へ軍勢を導き、高根山迂回に成功した。ふだん高根山からは閑道が見えていたが、この豪雨では高根山の部隊には信長たちの移動が認識できなかったのだ。

部隊が1.5キロ進み今の「大将が根」あたりまで来ると、その200mほど先が、この間道で最も標高の高い沓掛との間の峠となる。『信長公記』が書く沓掛の峠はここのことだ。ここにあった松（境松）の近くの大楠が、激しい風雨に倒れたのを見た信長の軍勢は「これは驚いた、我らは熱田社がついている神軍に違いない」とますます奮い立った。

そこから南へ曲がり、谷筋（現在の釜ヶ谷あたり）に潜んで勝機を待った。

新説・右翼から義元を打ち取る

　すると雨がやんだため、信長は「すわ、かかれ」と大号令をかけ、谷筋から桶狭間へなだれ込む。義元勢は右側面を奇襲されたわけで、肉弾戦が展開され、若武者たちはしのぎを削り鍔を割り、火花を散らし火炎を降らせての大乱戦となった。信長も若武者に混ざって槍を振り、午後二時ごろ、当時はげ山だった左手（東側）の山に塗輿があり、信長の予想通り義元がいた。「義元本陣はあそこだ、かかれ、かかれ」と信長は声をかけ、東の山の上の本陣を襲った。
300騎ほどで義元を守っていた旗本たちも、信長勢の何度も繰り返される執拗な攻撃に段々と数を減らし、ついに50騎ほどになってしまった。やがて津島の服部小藤太が義元に斬りかかるも膝の口を切られて倒れ、次に毛利新介が切りかかってついに義元の首を取ったのだった。
　こうなると大崩となった義元の兵は、皆が大高道方面を目指して逃げたので、桶狭間の深田にはまり込み這いずり回っていると信長勢が追いついてきて首を取られる。この頃になると戦いの初期と異なり、皆が首を取るのに夢中になり、一人で二つ三つの首をとる者もいた。義元の首を長久寺で確認して、信長はこの上なく満足し、もと来た道を帰り明るいうちに清須へ着いた。
　ここまでのストーリーでいえることは、この戦いは天候を利用しての迂回であり、雨に紛れて密かに近寄っての奇襲だったということだ。
　信長は国境で一戦を遂げるつもりではあったものの、当初、義元を討ち取れるとまでは思っていなかったのではないか。
　この金星は豪雨を自らの利として奇襲に転じた信長の天才的なひらめきによりもたらされたもの。迂回に転じた信長の歴戦の指揮官としての力量によって、今川との長い戦いにけりをつけることができたのだった。



雑誌『歴史群像』157号より

それでも残る謎

正光寺砦や刈谷の水野氏（家康叔父）の動向は？

戦いのあと、家康はなぜ無事に帰れたのか

結局、誰が一番得したのか

徳川史観を排除しない限りすべての謎は解けない

ご清聴ありがとうございました。

私のFacebookやX、
ブログhttps://okehazama.jpを
フォローしてください。
天理本現代語訳もぜひ。

戦闘があったのは名古屋市緑区の桶狭間古戦場。豊明の東海道沿いにある古戦場伝説地は、江戸時代の観光地だったのだろう